

鑑賞・干渉・感傷・勸奨

味わう

かわわる

心いためる

ほめる

武藤 豊

A 「読む」「書く」「聞く」「話す」

これらは国語の学習に於いて不可欠の要素である。しかし、実際に生徒達を見ていると「読む」のは小説より漫画であり、「聞く」のは人の話よりも音楽である。また、「話す」ことは総じて苦手であり、特に多人数を前にすると大方は言葉が続かなくなってしまう。発問して答えさせる時に答えが完結できず、こちらからフォローしてしまふことも多々ある。勿論、常に「待ち」の時間を経ての上であるが。それでは「書く」ことはどうかという点、これが中々良いのである。個人差はあるが、わりと素直に自分の内面が表現されている。「心の声」は文字によって展開される場合が多くなつたように思われる。だから、それを皆の前で読んでみたり、他の者に読ませたりすると、多くの反応が出てくる。そこに活気も生じ、単に「授ける」だけではない授業が存在する。生徒と教師が「創り上げる」雰囲気、私の理想の授業なのである。

B 古文・漢文とは

多くの高校生は思うだろう。何故「徒然草」や「論語」を読むのかと。教師は言うのである。「日本語の

昔の姿を見つめ、そこに現われる古人の考えを知るためだ。」と。そうであるならば、古典の原文と現代語訳の文章とを並べて示す方が良いのではないだろうか。何が書いてあるのか、とりあえず読むことができれば、そこから疑問や興味もわいてくるだろうし、古語の特異性にも注目できるだろう。「訳してごらん」と言うよりも「さあ読んでみよう」の方が、より有益だと思われる。

また、漢文は元来中国の文章を返り点や送り仮名を補って、やっと日本語のように読めるのだという事実は、明確に伝えたいことである。そして漢字から平仮名や片仮名が生まれ、日本語の文章が洗練されていくことを。江戸以前の男子の教養と言えば漢文の学習にあり、そうした意味で平安時代の女流文学（仮名文学）の存在は特色があり、日記や随筆といった文学の形式は、現代でも身近なものであるということも明示したい。

### C 文語文法より口語文法

また、高校生は思うのである。何故、古典文法なのかと。活用を沢山覚えるのかと。古文を読む上で、敢えて複雑な文法事項を押しつけるのは、あまり有益でない事である。生徒の多くは現代語の文法知識が少ないからである。中学終了までの段階で、中々体系的に文法の基礎をクリアすることは難しいと思われる。そこで、古代の文法に直面してしまうのでは、やはり生徒にはつらいものがある。古典文法の前に、もう一度現代語の文法を示すべきである。それも最低限、次の事項である。

#### ① 言葉の単位（文・文節・単語）

## ② 品詞分類

### ③ 活用という現象

この三つが予め頭にあるだけで、古典の文法も少しは取り組みやすくなるのではないだろうか。勤の良い子は気づくであろう。古代の動詞の方が活用のパターンが多いことに。ひよっとして二段が一段になるのかと。それが言葉の変化の過程であり、「口語化」するということかと。また、同じ品詞であっても、助詞や助動詞、副詞や連体詞はどこかレベルが異なるのではないかと考えるのであれば更にしめたものである。自立するものと付属するものが同じレベルであるはずがないとすれば、この分類はとりあえず種別であり、分類された一つ一つのレベルは違っても良いと気づく。学校で学ぶ分類が橋本文法によっている事を示し、他にも異なる考え方があったと示せば、文法も少しは丸くとらえられてくるのではないだろうか。

## D 現代文の課題

さて、国語には楽しい読み物もまた不可欠である。生徒に好評だった作品をいくつか挙げてみたい。青春ものとして「伊豆の踊り子」と「こころ」。共に長い作品だが、最後まで興味は持続し、感じ入る者も多かった。「羅生門」も上手さとスリルを楽しめた。「空飛ぶ男」のSF的な面白さや危機感。「トルソーの時代」(加藤典洋氏)に出てくる「ハードボイルドワンダーランド」なども、本編の随筆にも増して興味をおおる不思議な世界に魅かれた。「とんかつ」(三浦哲郎氏)のほのぼのとした味も良かった。

E 最後に

以上のことから、次のような点を再確認する次第である。

- ① 授業は教師と生徒が創り上げるもの
- ② 古典は現代語でよみたい
- ③ できれば楽しく